



虚子記念文学館報

2024年5月
第43号

生誕百五十年記念

子規・虚子・碧梧桐の 青春と俳句革新

令和六年四月二日〜令和七年三月九日

生誕百五十年にあたる本展は、虚子文学の原点に帰り、明治二十年代後半の俳壇に焦点を当てました。まさに子規・虚子・碧梧桐の青春時代です。

《小説への強い憧れ》

明治二十四年五月、虚子は受験のため上京して常盤会寄宿舎にいた碧梧桐を紹介して、帝大文科に通う子規へ手紙を出し、文学的指導を仰ぎました。伊予尋常中学五年生の虚子は、幸田露伴の「風流仙」や「対髑髏」、森鷗外の「舞姫」、坪内逍遙の「細君」、宮崎湖処子の「帰省」、饗庭篁村の「良夜」等の小説に夢中で、「国民之友」の別冊附録や「早稲田文学」を愛読していたからです。

一方碧梧桐は、二十三年春頃より子規に俳句の添削指導を受け、興が乗れば句作することも屢々で、虚子宛書簡



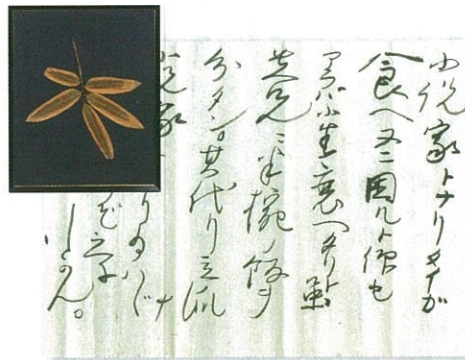
「国民之友」69号
明治23年1月新年別冊附録
には、森鷗外の「舞姫」や紅葉の「枯華微笑」が掲載されている。

でも近詠を披露しています。勿論虚子も二十四年秋頃より俳句をボツボツ始めてはいますが、この頃の虚子は、俳句より断然小説でした。

《子規から虚子への贈物「心竹」》

そして明治二十五年一月、中学卒業後は京都の第三高等学校予科(文科)を志望していた虚子は、医学部に進学して欲しい長兄と衝突。「小説家になりたいが、それでは飯が食へぬ」と嘆き、やけを起こして僅かな草稿を焼き捨て、文学への思いを断ち切ろうとしました。これに驚いた碧梧桐が子規に

手紙で知らせたところ、子規自身も面会謝絶で挑んだ小説「月の都」に大苦戦中ではありましたが、「草稿を焼くのは悟りを得た人がすること、君はまだ悟っていないようだが・・・」とやんわり諭しつつ、「飯が食へぬのなら自分の半腕を差し出すから、初心を貫け」という、力強いエールを届けてくれたのでした。



「心竹」を添えて贈られた虚子宛子規書簡
(明治25年1月13日)

しばらくハ篋も動かず雪模様
呉竹の奥に音ある叢哉
初雪や奇麗に笹の五六枚
木枯やさ、ハ余計にゆれながら
青竹をつたふ叢のすべり哉
年賀状代わりの熊笹に右の五句が朱墨で認められた「心竹」には、笹だけに些細なものではあるけれども、ありったけの心の丈(竹)を贈ったもので、「霜雪に堪えて萎まぬ力強さに学べ」という子規のメッセージが込められています。

《住込み書生になる覚悟》

この「心竹」書簡の甲斐あって再び小説家への思いを強くした虚子は、九月からの三高入学を前に、今すぐ上京して小説家の住込み書生となる覚悟を決め、問題点等を箇条書きして子規に手紙で打診しました。虚子の考えによれば、「衣服食料ハ自弁として、只居所を小説家の家の内に占め、朝夕親接して其持論を窺ふ」ことが目的で、尋常中学を卒業したばかりの今こそがチャンスであるが、一年半後にすんなり高等中学へ復学出来るかは甚だ不安であることも、正直に白状しています。前年十月、紅葉宅の玄関先二畳間に住み込み、雑用をこなしつつ紅葉について学び、見事小説家デビューを果たした泉鏡花のように、虚子も鷗外や逍遙の住込み書生となることを真剣に考えていたのです。この熱い虚子の思いを知った子規は、新聞「日本」の社主・陸羯南に虚子書簡を見せて相談し、陸から高橋健三を経て二葉亭四迷へ依頼状が届きました。しかし時既に遅く、四迷は作家活動を休止していました。さらに、虚子宅の家族会議において、長兄は頭ごなしに却下、中兄と三兄も「考へ物なり」とのこと、虚子の上京はあっけなく頓挫してしまつたのでした。

《子規は小説から俳句へシフト》

一方、小説「月の都」を書き上げた

子規は、二十五年二月下旬、谷中の露伴宅を訪ねて小説評と出版社の紹介を乞いました。露伴の出世作『風流仙』を、「破天荒ノ筆法ヲ以テ、優美ト宏壮トヲ兼ネタル」と子規は高く評価し、「月の都」の趣向も『風流仙』からヒントを得たものだったからです。木曾山中で出会った美女と仏師の恋物語を、西鶴風漢文調の文章で語る『風流仙』は、子規・虚子・碧梧桐にとって小説のお手本でした。



『風流仙』(複製)
『新著百種』5号として明治22年9月に刊行された。

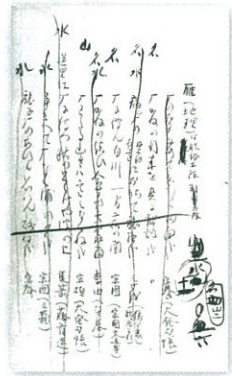
そして三月一日、子規は露伴から出版は難しいが、小説中の俳句は面白いと告げられ、十日に再び会って句合せを試みることとなりました。二人の句合「三人ものがり」が、露伴が担当する新聞「国会」に掲載されています。明治二十五年頃の小説界は「紅露時代」と称され、紅葉と露伴の全盛期でした。この二人と子規は皆数え年二十六歳のおない年で、紅葉は門人達とむらさき吟社を結成して指導し、芭蕉研究にこそしむ露伴も家族で句会を愉しみ、奇しくも三人は「小説と俳句」の二刀流だったのです。

露伴短冊「春霞国のへだてハなかりけり」



露伴から俳句を評価された子規は、以後俳句研究に邁進します。そもそも子規は明治十八年頃より俳句に興味を持ち、二十年夏の松山帰省中、湊町三津浜の俳諧宗匠大原其戎宅を訪問して入門。二年間は其戎に師事し、其戎の機関誌「真砂のしらべ」に子規句も掲載されています。しかし其戎没後の二十二年以降は誰にも師事せず、全く独学で俳句を研究しました。

子規はまず、図書館で借りたり、古本屋で購入した古俳書から同じ季題の句を抜き出し、それをさらに細分化するという、大層骨の折れる作業を積み重ねました。すると分類過程で様々な発見があり、子規はいよいよ俳句にのめり込んでいきます。



子規筆「俳句分類草稿」
甲号(季題別)

右は「雁」の句ばかりを抜き出した草稿で、句の上の「名」は「名所」「水」は「水辺」を意味しています。右から三句目の芭蕉句を例にとると、句集『猿蓑』に入集する「病む雁の堅田におちて旅寝かな」は、名所「堅田」と水辺を示す語が入ることから、さらに雁と名所と水辺の句ばかりの草稿へ写し替え、写し終えた句に傍線を引いています。

この俳句分類により、季題別に連歌

時代から幕末までの句の変遷がわかり、類句も容易に確認することが出来ます。子規はこの膨大なオリジナルデータを基に、新聞「日本」において俳論「頼祭書屋俳話」を展開。新しい俳句の在り方を模索すると共に、旧態依然とした俳諧宗匠達の句を批判しました。勿論新聞というメディアに俳句や俳文が掲載されることは二十五年以前からもありましたが、「頼祭書屋俳話」のような本格的な俳論は子規が初めてです。

さらに二十五年十二月より日本新聞社の正社員となった子規は、翌二十六年二月三日、新聞「日本」一面左端に新しく俳句欄を設け、子規派の句を紹介しました。ちなみに二月三日の虚子句は、短冊にある二十六年元旦の詠です。

虚子短冊「酒もすき餅もすき也今朝の春」



『明治初期の俳壇』

小説界では、明治十八年の坪内逍遙著『小説神髓』『当世書生気質』を皮切りに、虚子を魅了した幾多の近代小説が続々と上梓されましたが、俳諧は庶民の文芸として盛んであるものの、宗匠達の作品や指導法は、明治になってからも幕末と何ら変わりませんでした。

ただ明治五年、新政府により教部省が置かれ、神道を基本に仏教を認め、キリスト教を黙認する体制が作られます。その結果、祭政一致・社会強化を目的と

する教導職に、神官や僧侶と同様、俳諧師も任命されることになり、翌六年登用試験が実施されました。この試験に見事合格したのが三森幹雄と鈴木月彦の二名で、関為山、橘田春湖、鳥越等裁といった老大家は、推薦という形で任命されています。間もなく為山は教林盟社を創設し、初代社長に就任。春湖が二代目、小野素水が三代目と、俳諧師も会社組織へ移行していったのでした。

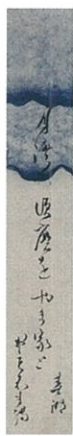
為山短冊

「市中隠栖 明るまでたゞ名月の戸口かな」



春湖短冊

「月澄や須磨をやま家とおもふまで」



また教導職の導入により、発句も教訓色の強い傾向にありました。明治十二年より機関誌「俳諧新報」を創刊した松田聴松は、巻頭に「本報一篇の大意ハ専ラ教訓、諭言ヲ主トシ」と毎号記しています。幹雄も翌十三年より、俳諧を神道の教義に付会して国民を強化することを目的とした機関誌「俳諧明倫雑誌」を創刊。教導職は十七年八月に廃止されますが、幹雄はその後も「神道芭蕉派」と自称し、「神道芭蕉派明倫教会」なる会社を組織しています。教訓じみた句や新興宗教まがいの俳句サークルに、青年虚子の心が動かなかったのも頷けます。

《明治二十六年、芭蕉二百回忌》

さらに明治二十六年は芭蕉二百回忌にあたり、全国の俳諧宗匠達が未曾有の盛り上がりを見せ、芭蕉塚や芭蕉句碑が林立し、霊廟までもが建立されました。これに対し子規は、皆売名行為に過ぎないと、猛然と抗議しています。

今年は芭蕉翁の二百年忌に相当せりとて、或は深川に霊廟を建て、或は義仲寺に石碑を建てんとの計画などありと聞く。翁を祭るは善し。霊廟を建てるは翁の意に非るべし。石碑を建てる、亦翁の意に非るべし。祭る者、誠意を以て祭らずして名聞のためにし、碑を建てる者翁の功を勤せんとはあらで、我名を銘せんとす。翁も亦迷惑と謂ふべし。

〔俳諧〕創刊号 子規「近時漫録」この霊廟や石碑を建てた張本人、幹雄、永機、聴秋ら三宗匠による芭蕉二百回忌興行を御紹介しましょう。

子規より三十八歳上で、機関誌「俳諧明倫雑誌」の会員三万人を誇る幹雄は、全国の俳人達からの寄進をもとに深川に芭蕉廟を造営。芭蕉を「花の下



大成教古池協会 三森準一編
「芭蕉神社遷座記念集」

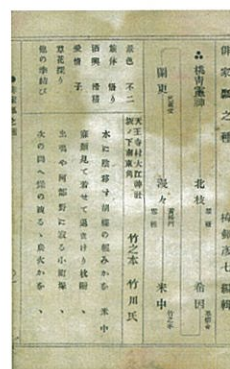
大霊神」と称して仰々しい神道まがいの式典を敢行しました。

また芭蕉句碑を生涯十基以上建立した、幹雄と並んで著名な宗匠永機は、『元禄 枯尾華』『明治 枯尾華』の豪華二冊本を刊行。七日七夜に及ぶ百韻一卷を義仲寺に奉納した二十年十月の取越法要や、二十五年の奥羽北陸（奥の細道）行脚での連句、二十六年伊賀柘植の里での芭蕉句建碑歌仙興行等が収録されています。



『明治 枯尾華』
(越後敬子氏蔵)

なお『元禄 枯尾華』は、芭蕉の高弟其角が上梓した芭蕉追善集で、永機自身が所持していた『枯尾華』を、安価な活版印刷が浸透していた時代に、敢えて版木に彫らせて完全コピーしたもの。これは其角堂を名乗る永機が、其角をリスペクトしていることを顕示すると共に、永機こそ其角の流れを汲む正統派宗匠であることを誇示しています。当時の宗匠達は流派を大層重視したため、宗匠紹介の冒頭に流派を示す系図が書かれていました。明治二十年四月に大阪で出版された『俳家瓢之種』にも、皆「桃青霊神」（芭蕉）から始まる系図が付されています。



『瓢之種』
(小田直寿氏蔵)

また永機は、弟子に花柳界や歌舞伎役者も多く、特に五代目尾上梅幸のひいきで、茶道や花道に通じた粹人でした。敢えて版本仕立にこだわるのも、粹人永機らしい趣向なのでしょう。

さらに京都の聴秋は、二十六年十一月十九日、東福寺本坊西に芭蕉の「ふる池や蛙飛こむ水の音」句碑を建立。日出新聞記者として取材に来た巖谷小波の記事によると、当日の祭典は開山堂での読経に始まり、普門院での正式俳諧興行の後には抹茶が供され、逍遙や紅葉も同席し、大変な賑わいだったといえます。

聴秋はもと大垣藩士で、十六歳の時戊辰戦争北越別隊に参加し、明治二年に慶応義塾に学んだ異色の経歴を持つ宗匠で、十七年に京都で梅黄社を起し、機関誌「俳諧鴨東集」を創刊。二十一年「俳諧鴨東新誌」と改題し、二十三年には三千六百部を発行。懸賞俳句等で会員を増やし、昭和七年に亡くなるまで、最後の俳諧宗匠として活躍しました。



《子規と伊藤松宇の出会い》

近代にふさわしい俳句はどうあるべきなのか、孤軍奮闘する子規に共鳴者が現れました。伊藤松宇を中心とする、「椎の友」の句会仲間達です。

松宇と子規の出会い、新聞「日本」に子規が連載していた「獺祭書屋俳話」を松宇が読み、従来宗匠達が語る俳諧とは着眼点が全く異なることに驚き、「獺祭書屋俳話主人」なる人物に会って是非話がしたいと思ったことに始まります。

松宇は子規より八歳年上で、父洗耳が護物、西馬、由誓ら宗匠に詠草を送って添削してもらっていたことから、自身も十三歳頃より俳句を嗜み、春湖、永機、幹雄、金羅等に添削を求め、短冊や扇子を揮毫してもらい、同志で分配して愉しんでいました。明治十五年に信州から上京して簿記や算術を東京で学び、暇に宗匠宅を訪ねて俳諧の質問をする必要を得ず、子規と同様に宗匠に不審を抱くようになったといえます。二十四年五月より友人の猿男や桃雨、桂山ら四人で椎の友句会を開き、宗匠を立てず、互選による運坐を試みていました。

その後、たまたま桃雨の友人で帝大国文学教師である高津鉄三郎に「獺祭書屋俳話」の話をしたところ、執筆者は帝大国文に通う学生・正岡常規（子規）であることが判明し、松宇は旧作の富士百首を送って批評を仰ぎました。

二十五年十二月から、子規と松宇の交流が始まっています。

《子規と松宇の俳句革新》

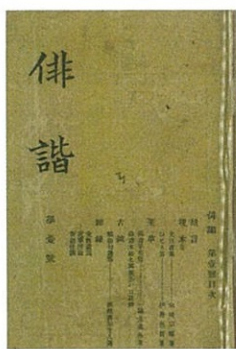
子規は松宇宅での椎の友句会に参加し、初めて宗匠を立てない、互選による句会を体験し、以後自らの句会にも取り入れています。



互選による句会
(明治28年2月17日)
子規従軍送別句会採点表

また古俳書の蒐集に務めていた松宇から、天保調の現今の宗匠俳句よりも、蕪村、晩台、蘭更、白雄ら天明調の句が面白く感じるという意見が出ます。これには子規も大賛成でした。

さらに二十六年三月、桃雨の発案で、子規と椎の友俳人による、新派初の機関誌「俳諧」が創刊しました。子規が俳諧に関する論説と選評、松宇が古俳書の解題を執筆し、猿男と桃雨の四人で編集した、純粹に俳句研究と実作を愉しむ人のための雑誌です。

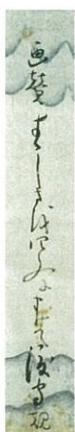


「俳諧」創刊号
明治26年3月23日刊
(俳句文学館蔵)

虚子は子規から贈られた創刊号を熟読し、丁寧な御礼状を認めています。碧梧桐も友人に購読を勧めたようですが、門人を持たない研究者による機関誌は売上げが伸びず、残念ながら二号で終刊となっていました。

しかし句会は継続され、子規に感化されて俳句を始めた常磐会寄宿舎監督の内藤鳴雪も、仲間に入っています。

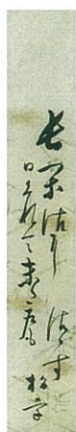
子規短冊
「画賛 すじさを四文にまけて渡守」



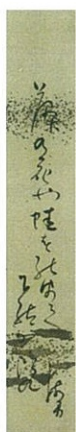
鳴雪短冊
「我声の吹戻さるゝ野分かな」



松宇短冊
「長閑さに日ぐれて未だ戸もさゝず」



森猿男短冊
「藻の花や蛙をのせて下駄が浮く」



《子規の芭蕉二百回忌》

実は、子規も日本新聞社から派遣され、後に「はて知らずの記」と命名される、奥の細道足跡行脚に出ています。二十六年七月三日、子規は林江左を介し、初めて三森幹雄と島本青宜に面会しました。子規は幹雄に紹介状を書いてもらい、各地で宗匠達と俳諧問

答を交すことも旅の目的の一つでした。三十日には白河で幹雄門の中島山麗宗匠に会い、翌三十一日には須賀川で道山壮山宗匠を訪ねています。そこで芭蕉を神と崇め、芭蕉句はすべて珍重する地方宗匠の実態を知り、十一月から連載した「芭蕉雑談」で「芭蕉の俳句は過半悪句駄句」と敢えて芭蕉句を酷評しています。全国に五百人以上はいたであろう俳諧宗匠と十万人近い門下俳人を、すべて敵に回す覚悟の、実に挑発的な俳論でした。この「芭蕉雑談」は、子規の初期業績の集大成『増補再版 頼祭書屋俳話』に収められています。



『増補再版 頼祭書屋俳話』
明治28年9月5日刊

《子規が大奮闘した「小日本」》

新聞「日本」は通商条約問題で政府批判をしたため、再三に亘って発行停止を余儀なくされました。そこで、本紙が停止処分を受けても新聞が発行できるように新たに創刊されたのが「小日本」です。新聞「日本」創刊五周年にあたる二十七年二月十一日に、創刊されました。本紙六〜八頁前後の、小説や俳句等文芸記事中心の新聞で、子規が編集主任に大抜擢されます。「小日本」には五百木飄亭、佐藤紅緑、石井露月、福田把栗、

そして専属挿絵画家として入社した中村不折らが子規の片腕となって集まり、子規を支えてくれました。

この「小日本」で子規は、一度は出版をあきらめていた小説「月の都」を加筆修正して連載し、リベンジを果たしています。「小日本」記事のための執筆や原稿依頼、編集や校正で、子規は多忙を極めました。

なんとこの時、小説家を目指して三高を中退し、単独上京していた虚子が常磐会寄宿舎に身を寄せており、忙しい子規に代わって、国会図書館で資料の下調べをすることもあったようです。滞在中の虚子は、肝心の小説は一篇も書けませんでした。京都までの帰路、『風流伝』の舞台である木曾路を通り、紀行文「木曾路の記」を執筆しています。これが「小日本」に連載され、虚子文章のデビュー作となりました。



「俳句二葉集 春の部」
明治27年5月30日の新聞「小日本」と共に配布

さらに新聞「小日本」からは、子規派初の選句集も生まれました。新聞の附録として配布された「俳句二葉集」は、収録句四百三十五句、三十二頁の小冊子ですが、「小日本」での募集俳句から即句集を作成するという子規のアイデアはさすがです。

子規の俳句革新を浸透させ、子規派

俳人を一気に拡大することに成功した「小日本」でしたが、日本新聞社の経済的事情と清国との緊迫関係などの理由により、七月十五日、わずか五ヶ月で廃刊となつてしまいました。子規の落胆は大きく、翌年の日清戦争従軍へと駆り立てる要因となりました。帰国の船中で咯血して九死に一生を得た子規が、故郷松山の漱石下宿愚陀仏庵で療養していた二十八年十月、子規派以外の新派俳人が手を組み、新たに「秋声会」なる結社が誕生しました。

秋声会は、毎日新聞に俳句や紀行文を掲載していた弁護士角田竹冷が主唱者となって、読売新聞で活躍する尾崎紅葉が指導し、鏡花や風葉ら門下で結成した「むらさき吟社」、洒竹や醒雪ら帝大の俳句サークル「筑波会」、子規や鳴雪と俳句革新を試みていた松宇ら「樵の友」といった各結社が合体したもので、子規派が日本新聞に拠つたのと同様に、秋声会は読売或いは毎日新聞を基盤として句会報や俳論、募集句等を展開しました。基本的には新派の集まりですが、蛸崎潭龍や幹雄の婿養子松江といった旧派宗匠も当初から参加しています。これは社交的だった竹冷が「門派の異同は、問ふ所にあらず」と門戸を開いたからでした。子規派は二・三十代の学生や青年俳人が多く、秋声会は弁護士、裁判官、市会議員

編集者といった職を持ち、俳句はあくまで趣味で個々に愉しむ、サロンの遊俳が大半でした。

なお、本誌は紙面の都合上、秋声会俳人の作品に触れていませんが、地下展示室にて短冊と機関誌を一堂に陳列しておりますので、是非御一覽下さい。

秋声会の結成は、勝気な子規の闘志

を煽つたのでしよう。二十八年十月二十二日、子規は再び奮起して新聞「日本」に新連載「俳諧大要」を開始。その冒頭に、「俳句は文学の一部なり。……即ち絵画も彫刻も音楽も演劇も詩歌も小説も、皆同一の標準を以て論評し得べし」と掲げました。



子規著『俳諧大要』
明治32年1月20日刊

「俳諧大要」は海南新聞にも連載され、松山の俳人に向けた俳句入門書だと言われているが、「俳句も小説と同じ文芸である」という子規の力強い主張は、これまで俳句に尻込みしていた虚子や碧梧桐へ向けた発言でもあったのです。

虚子や碧梧桐の俳句は、ここから始まったと言っても過言ではありません。

(学芸員 小林祐代)

（令和五年三月三十一日）
稲畑 廣太郎 選

兼題「磯開・三桮の花」その他当季雑詠
第一句会入選句

師の愛でし三椏の花想ふ庭
迷ひなく峯なる三椏の花は
蟹走り貝は足出す磯開
定型を三椏の花からみつ
水平線ぐいと引き寄せ磯開
三椏の花活け越前紙の店
常ことの畑仕事終へ磯開
波音に誘はれてをり磯開
三椏の花を差配の森の精
磯開海女に年功序列あり
三椏の花一本に風三つ
三椏の咲く山里の日の薄し
生命の母なる海よ磯開
磯開戻す半分小なりぬ磯開
黒潮の帯濃くならぬ磯開
瀬戸内てふ芦屋の浜も磯開
三椏の花巫女の花聞えう
新人の美女の海女増え磯開
三椏の花の明暗山雨急
磯開島をぐるりと回覧板
虚子館へ花の絵巻の川路かな
三椏の花又の又の先
採りたての貝の味も磯開
三椏の花の影にもりフレイ
三椏の花にタ星さやけり
三椏の花のワルツに風の添ふ
三椏の開き三方エールの黄
工札になるてふ珍粋三椏の花
工房の窓に三椏黄の満ちて
磯開干物焦がさぬやうに焼く
有線の声も昂る磯開
浦のふけマキト知らず磯開
程の良き花三椏の枝の角度
みつまたの花に始まるころの詩
島の子は波と仲良し磯遊
磯開逢れて急ぐ吸潮
潮の香にまづ深呼吸磯開
磯開潜り頭の見え隠れ
海の色のまにまに磯開
磯開沖の小島に時の旅
すぐ水に入りがる磯開
三椏の花の一句を超えられず
三椏の花の秩序に見惚れたる
大方の穴場は押さへ磯開
磯開旗ひらめきぬ淡路島
大振りの貝ふるまは磯開
潮鳴りにまじる祝詞や磯開
磯開するも禁漁区は定め
三椏の揺れて咲く黄の三拍子
三椏の舞く花にある寒
三代目継ぎたる海女や磯開
神棚のある小屋を出て磯開
天空に三椏の花踊り出す
能登の女子礁をひいと磯開
波音に海女の家あり磯開

徳岡美祐 三角 節
三好よう 三好よう
奥村つよ 奥村つよ
北上美佐 北上美佐
石橋 石橋
長安 長安
石橋 石橋
山田 山田
長安 長安
徳岡美祐 徳岡美祐
奥野 奥野
奥村つよ 奥村つよ
田邊 田邊
奥野 奥野
奥村つよ 奥村つよ
窪田由紀 窪田由紀
三好よう 三好よう
北上美佐 北上美佐
奥村つよ 奥村つよ
石橋 石橋
田邊 田邊
石橋 石橋
松村 松村
多田羅紀 多田羅紀
池本 池本
石橋 石橋
奥田 奥田
池本 池本
黒田千賀 黒田千賀
松村 松村
福島 福島
森岡喜恵 森岡喜恵
一坪 一坪
中嶋 中嶋
一坪 一坪
奥野 奥野
祐森 祐森
奥田 奥田
吉村 吉村
吉村 吉村
吉村 吉村
吉村 吉村
吉村 吉村
山本 山本
辰巳 辰巳
中嶋 中嶋
石角 石角
石橋 石橋
長安 長安
藤田 藤田
藤田 藤田
佐藤美沙 佐藤美沙

[illegible]

人寄せの海女、素著け磯開
まだ少し波の尖りて磯開
三極は恋の三叉路花揺るる
浜に生れ海に生かれ磯開
磯開波路の海に赤き潮
泥仕合始まりさうな磯開
子等なべて国の宝や磯開
この星の潮の満ち干や磯開
新調のウェットスーツ磯開
卓上の三極の花弾けだす
海の色の色かはる磯開
磯開近しと波が語りより
志摩に生れ磯開はや半世紀
山荘は亮りに出て三極の花
磯開ひかりを返す波の音
○三極の黄は川音に傾きをり
幣の白蒼天祓ふ磯びらき
浄めたる酒は地の物磯開
天界にて汀子師句会題は花
透きとほる風の小波磯開
磯開漁協に人の出入り急
みつまたの咲くびだまりの丸きかな
磯開光の中に眼を凝らし
海光に潮の影らむ磯開
陽炎の中にある磯開
貝拾ふ海は遠浅磯開
ネッシーも海から出さう磯開
三極の花三角といふ恋路
一湾の上ぐる潮の香磯開
見あげても枝垂桜のなほ上に
その中に恋の芽育て磯開
○海神の許しをうて磯開
潮の色今朝より変り磯開
生家から浜は一分磯遠
○潮を読むことより一歩磯開
荒磯へ胸弾ませる磯開
三極の花の法則明快に
守り継ぐ七つの提磯開
三極の花三姉妹みな美人
◇
(廣太郎先生出句)
磯開平家滅びし浦指呼に
磯開衛艦沖行く浜の磯開
三極の花の呪縛を解く忌日
サイレンに波音和せる磯開
三極の花咲いて三人遺されて

第二句会入選句

○磯開心躍らず響きあり
○海女の子の長さ手足や磯開
洗はれて波の足跡磯開
大航海待つてゐる庭ら磯開
水音の絶えし師の庭島雲に
○新入りの海女は十六磯開
三極の花千金の夢の彩
啓示てふ三極の花風ばかり
歌声の抜ける音空磯開
桜散る鼓の音の聞こえ来し
白旗に上がる歌声磯開
一齊に船出して今朝の磯開
三極の咲いて計算狂ひ出す
限りある海の思ひや磯開
磯開いくりを仕切る海女の声
○三極の花に影る日差かな
三極の花活けにくし自由型

近藤 六健
玉手のり子
田附 光映
辻田あづき
田村恵津子
杉山千恵子
西村みどり
高野 さち
高橋 純子
横山 節子
堀江 信彦
玉手のり子
田附 光映
田村恵津子
辻田あづき

奥村つよし
辰巳 澄子
金田 孝子
小川 八子
山崎 倫子
山崎 由紀
徳永由起子
徳永 千草
安野 悦子
松村 咲子
福島 良枝
福島 通枝
黒田千賀子
石橋 千通子
石橋 玲子
窪田由紀子
窪田 好子
徳岡美祐子
北上美佐子
佐藤美佐子
佐々木 葉流
辰巳 葉流
徳岡美祐子
北上美祐子
田上 華流
鎌野 光子
森岡喜恵子
河村久美子
西村 節子
福島 良枝
池本 準一



虚子記念文学館に咲く

花の歳時記

黄桜

稲畑汀子邸の庭には数種類の桜があり、写真は「黄桜」と呼ばれる花である。花弁が淡黄色あるいは白みがかった淡緑色に色付く黄桜は、人の手が加えられた改良品種で、別名として「里桜」とも呼ばれる。里桜は黄系統の花色を持つ桜の群称で、鬱金や御衣黄、胡蝶などの品種がある。

稲畑邸の黄桜は「御衣黄」。オオシマザクラを基に生まれた日本原産の栽培品種で、その名前は江戸時代中期から見られ、貴族の衣服の萌黄色に近いことに由来する。八重咲きの黄緑に近い緑色の中輪の花をつけ、中心部に紅色の条線があり、開花時には目立たないが、次第に中心部から赤みが増してきて、散る頃にはかなり赤くなる。稲畑邸では、ソメイヨシノから少し遅れた四月中から下旬に花を咲かせている。



令和六年能登半島地震で被害に遭われた皆様にお見舞いを申し上げます。

虚子は昭和二十四年四月下旬能登半島を旅し、七尾、輪島、中島などを訪問。能登ホトトギス俳句大会に参加。能登言葉親しまれつ、花の旅奥能登は漸く木の芽吹く頃か

虚子（昭和二十四年）

第十八回国際俳句シンポジウム 第十七回虚子生誕記念俳句祭開催

令和六年二月十七日（土）、公益社団法人日本伝統俳句協会主催の第十八回国際俳句シンポジウムが開催されました。シンポジウムは今回より内容が大幅リニューアルされ、東京会場と虚子記念文学館の芦屋会場をオンラインで繋ぐ二元中継形式、さらにアメリカからのオンライン登壇もあり、「国際俳句から地球俳句へ」伝統俳句の可能性にふさわしい会となりました。

二月十八日（日）、第十七回虚子生誕記念俳句祭が開催されました。感染症対策に留意しつつ今回より表彰状の授与を再開いたしました。青少年の部受賞者の皆様の元気なお声も戻って参りました。芦屋市長高島峻輔氏がご参加ください、ご挨拶をいただき、芦屋市長賞受賞プレゼンターをお努めくださいました。



芦屋市長がご参会くださいました。市長と選者、受賞者の皆様

続いて記念講演では、「俳句とは何か」俳句の国際化を念頭に、旧派俳諧との対比から」と題し、小田直寿氏（大阪電気通信大学非常勤講師・俳文学史）に登壇いただきました。膨大な資料をもとに軽妙かつユーモアあふれる語り口で、「俳句とは？」文学とは？」をご講演いただきました。



記念講演「俳句とは何か」講師 小田直寿氏

来館者10万人達成

平成十二年二月の開館以来の来館者が十万人となりました。十万人目は一月六日の芦屋ホトトギス句会にご参加の北上美佐子様（大阪府）です。稲畑廣太郎館長より記念品と色紙を贈呈いたしました。



稲畑館長と北上様

賛助会更新のご案内

会員の皆様には、令和六年度の更新をお願い申し上げます。賛助会は、虚子記念文学館を応援して下さる方はどなたでもご参加いただけます。新規のご入会を歓迎いたします。俳句やご金額にかかわらず小口ご寄附も随時受け付けております。公益法人へのご寄附として税控除の対象となる

廣太郎

◆令和6(2024)年度 虚子記念文学館休館日カレンダー◆

令和6年 4月	5月	6月
日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
7月	8月	9月
日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30
10月	11月	12月
日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
令和7年 1月	2月	3月
日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28	日 月 火 水 木 金 土 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

休館日（●印）毎週月曜日、祝日の翌平日、夏期、年末年始 他やむを得ず臨時閉館させていただく場合があります。展示登壇期間中は、一部ご覧いただけません。ご了承ください。

虚子記念文学館館報 第四十三号

令和六年五月一日
編集・発行 虚子記念文学館
〒六五九〇〇七四
兵庫県芦屋市平田町八二二
電話（〇七九七）二一〇三六
FAX（〇七九七）三一一三〇六
HP 7/23: <http://www.kyoshior.jp/>
e-mail 7/23: kyoshi@asemai.ne.jp

りますので、お問い合わせくださいませ。館の運営には、皆様のお力添えが欠かせません。どうぞよろしく願い申し上げます。

理事会・評議員会報告

公益財団法人虚子記念文学館理事会、評議員会が開催され、次のことが審議、決定されました。
（令和五年六月）
・令和四年度事業報告と決算（令和六年二月）
・令和六年度事業計画と予算